桜

岡本かの子

青空文庫

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命(いのち)をかけてわが眺(なが)めたり

さくら花咲(ばな)きに咲きたり諸立(もろだ)ちの棕梠春光(しゅろしゅんくわう)にかがやくかたへ

この山の樹樹(きぎ)のことごと芽ぐみたり桜のつぼみ稍(やや)ややにゆるむ

ひつそりと欅大門(けやきいもん)とざしありひつそりと桜咲きてあるかも

丘の上の桜さく家(いへ)の日あたりに啼(な)きむつみ居る親豚子豚

ひともとの桜の幹(みき)につながれし若駒(わかごま)の瞳(め)のうるめる愛(かな)し

淋しげに今年(ことし)の春も咲くものか一樹(ひとき)は枯(か)れしその傍(そば)の桜

春さればさくらさきけり花蔭(はなかげ)の淀(よど)の浮木(ふぼく)の苔(こけ)も青めり

ひえびえと咲きたわみたる桜花のしたひえびえとせまる肉体の感じ

散りかかり散りかかれども棕梠の葉に散る桜花ふぶき溜るとはせず

ならび咲く桜の吹雪ぽぷらあの若芽の枝の枝ごとにかかる

わが庭の桜日和の真昼なれ贈りこしこれのつやつや林檎

青森の林檎の箱ゆつやつやと取り出でてつきず桜花の樹のもと

林檎むく幅広ないふまさやけく咲き満てる桜花の影うつしたり

地震崩れそのままなれや石崖に枝垂れ桜は咲き枝垂れたり

しんしんと桜花かこめる夜の家突としてぴあの鳴りいでにけり

しんしんと桜花ふかき奥にいつぽんの道とほりたりわれひとり行く

せちに行けかし春は桜の樹下(こした)みちかなしめりともせちに行けかし

さくら花ひたすらめづる片心(かたごころ)せちに敵(かたき)をおもひつつあり

朝ざくら討たば討(う)たれむその時の臍(ほぞ)かためけりこの朝のさくら

あだかたきうらみそねみの畜生(ちくしやう)が桜花(さくら)見てありとわれに驚く

わが婢(はした)なにおもふらむ廚辺(くりやべ)の桜花(はな)の樹(こ)のもとにあちらむき停(た)てり

この朝の桜花(はな)の樹(こ)のもと小心の与作(よさく)ものつと歩み出でたり

わが幼稚(をさな)さひたはづかしし立ち優(まさ)り咲き揃(そろ)ひたる春花(はるはな)なれや

咲きこもる桜花(はな)ふところゆ一(ひと)ひらの白刃(しろは)こぼれて夢さめにけり

わがころも夜具に仕換へてつつましく掻い寝てけり月夜ざくら

角立ちのみじかきからに牛の角つのだち行けどふれずさくらに

いみじくも枝垂るるさくら日の本の良子女王が素直きおん眉

可愛ゆしといふわが言の畏こけれ桜花見ますかわが良子ひめ

新しき家居の門に桜花咲けど夜を暗み 提灯 つけて出でけり

桜花さける道は暗けど一しんに提灯ふりて歩みけるかも

わが持てる提灯の炎はとどかずて桜はただに闇に真白し

いつぽんの桜すずしく野に樹てりほかにいつぽんの樹もあらぬ野に

桜ばな暗夜に白くぼけてあり墨一色の藪のほとりに

つぶらかにわが眼(め)を張(は)ればつぶつぶに光こまかき朝桜かも

ひんがしの家(や)の白かべに八重(やへ)ざくら淋漓(りんり)と花のかげうつしたり

さくら咲く丘のあなたの空の果て朝やけ雲の朱(しゅ)を湛(たた)へたり

わだつみの豊旗雲(とよはたくも)のあかねいろ大和島根(やまとしまね)の春花(はるはな)に映(は)ゆ

ひさかたの光のどけし桜ちるここの丘辺(をかべ)を過ぐる葬列(さうれつ)

ほそほそと雫(しづく)しだるる糸ざくら西洋婦人濡(ぬ)れてくぐるも

糸桜ほそき腕(かひな)がひしひしとわが真額(まひたへ)をむちうちにけり

わが家(いへ)の遠(とほ)つ代(よ)にひとり美しき娘ありしといふ雨夜(あまよ)ざくら

真玉なす桜花のしづくに白黒のだんだら犬がぬれて停ちたり

折々にしづくしたたる桜花のかげ女靴のあとのとびとびに残る

ほそほそと桜花の奥より見えて来る灯にまさりたる淋しき灯なし

桜花の奥なにたからかに語り来る人ありて姿なかなか見えず

糸杉のみどり燃えたりそのかたへふわふわ桜咲き白むかも

桜さく丘にのぼれば遠かたの松ふく風の声かそかなり

この丘の桜花のもとゆ見はるかす遠松原のほのぼのしかも

松の間に桜さきたり松の葉の黒きひまよりうす紅ざくら

ミケロアンゼロの憂鬱はわれを去らずけり桜花の陰影は疲れてぞ見ゆれ

桜花(はな)あかりさす弥生(やよひ)こそわが部屋にそこはかとなく淀(よど)む憂鬱

かなしみがやがて黒める憂鬱となりて術(すべ)なし桜花(はな)のしたみち

早春の風ひようひようと吹きにけりかちかちに莟(つぼ)む桜並木(なみき)を

かちかちにつぼむ桜の樹下(こした)みちしなび蜜柑(みかん)を曳(ひ)いて通るも

さくら咲くあかるき外(と)には立ちにけりわが衣(きぬ)の皺(しわ)にはかに著(しる)し

仁丹(じんたん)の広告灯が青くまた赤く照(てら)せり夜(よ)の桜ばな

桜花軒場(さくらばなのきば)に近し頬(ほ)にあつるかみそりの冷えのうすらさびしき

山川のどよみの音のすさまじきどよみの傍(そば)の一本桜(ひともと)

桜花さけど厨女房いつしんに働きてあり釜ひかる厨

裏庭のひよろひよろ桜てふずばの手ふき手ぬぐひ薄汚れたり

しんしんと家をめぐりて桜さくおぞけだちたり夜半にめざめて

けふ咲ける桜はわれに要あらじひとの嘘をばひたに数ふる

さかんなる桜はわれになまぬるき「許しの心」あに教ふべしや

薄月夜こよひそかに海鳥がこの丘の花をついばみに来む

この丘に桜散る夜なり黒玉の海に白帆はなに夢むらむ

夜は夜とて闇の小床に淡星と語らふものか小ざくら桜

こよひわきて桜花の上なる暗空に光するどき星ひとつあり

ひとり見る山ざくらばな胃を病みてほろほろ苦き舌を含めり

ねむたげな桜並木を一声の汽笛の音がつつ走りけり

駅前の石炭の層にうらうらと桜花ちりかかる真昼なりけり

自動車の太輪の砂塵もうもうとたちけむりつつ道の辺の桜

真白なる鶏ひとつ今朝みれば血に染みてあり桜花の樹のもと

空高く桜咲けどもわがたどる一本の道は岩根こごしき

さくらばな咲く春なれや偽りもまことも来よやともに眺めな

日の本の春のあめつち豪華なる桜花の層をうちに築きたり

おのづから蔭影こそやどれ咲き満てる桜花の層のこのもかのもに

にほやかにさくら描かむと春陽のもとぬばたまの墨をすり流したり

にほやかにさくら描きておみな子も金もうけむとおもひ立ちたり

おみな子の金もうくるを笑はざれ日本のさくら震後の桜

日本の震後のさくらいかならむ色にさくやと待ちに待ちたり

金ほしきおみなとなりて眺むれど桜の色は変らざりけり

金ほしき今年の春のおのれかもいやうるはしと桜をば見つ

このわれや金とり初めの日の本の震後の桜花の真盛りの今日

停電の電車のうちゆつくづくと都の桜花をながめたるかも

桜さく頃ともなればわきてわが疲(つか)るる日こそ数は多けれ

かろき疲れさくらさく椽(えん)にかりそめの綻(ほころ)びもわがつくろはずけり

しばたたきうちしばたたき眼(め)を病(や)めるわれや桜をまともには見ず

さくら花(ばな)まぼしけれどもやはらかく春のこころに咲きとほりたり

うつらうつらわが夢むらく遠方(をちかた)の水晶山に散るさくら花

うちわたす桜の長道(ながて)はろばろとわがいのちをば放ちやりたり

外(と)の面(も)には桜盛(さか)るをわが瓶(へい)の室咲(むろざ)きの薔薇(ばら)ははやもしぼめり

真黒くわれ動(うごか)ざりあしたより桜花(はな)は窓辺(まどべ)に散りに散れども

ひそかなる独言なれけふ聞きてあすは忘れよひともと桜

遠稲妻そらのいづこぞうちひそみこの夜桜のもだし愛しも

かきくもる大空のもとひそやかに息づきにつつこの丘の桜

かそかなる遠雷を感じつつひつそりと桜さき続きたり

なごやかに空くもりつつ咲き盛る桜を一日うち和めたり

気難かしきこの家の主人むづかしき顔しつつさくら移植させて居り

歌麿の遊女の襟の小桜がわが傘にとまり来にけり

政信の遊女の袖に散るさくらいかなる風にかつ散りにけん

うたかたの流れの岸に広重が現の桜花を描き重ねたり

咲き倦(う)みて白くふやけし桜花(はな)のいろ欠伸(あくび)かみつつわが見やりたり

みちばたのさくらの太根玉葱(ふとねたまねぎ)を懇(ねもごろ)いだきわがいこひたり

ほろほろと桜ちれども玉葱はむつつりとしてもの言はずけり

何がなしかなしくなれりもの言はぬ玉葱に散り散り滑(すべ)るさくら

ここに散る桜は白し玉葱の薄茶(うすちや)の皮ゆ青芽(あをめ)のぞけり

春浅しここの丘辺(をかべ)の裸木(はだかぎ)の桜並木(なみき)を歩(あゆ)みつつかなし

さくら木のその諸立(もろだ)ちのはだか木にこもらふ熱を感ぜざらめや

松の葉の一葉(ひとは)一葉に濃(こま)やけく照る陽(ひ)のひかり桜にも照る

若竹のあさきみどりに山ざくら淡淡と咲きて添ひ樹てるかも

桜花ちりて腐れりぬかるみに黒く腐れる椿がほとり

地を撲ちて大輪つばき折折に落つるすなはち散り積むさくら

大寺の庭に椿は敷き腐り木蓮の枝に散りかかる桜

ぼたん桜ここだく樹てり尼たちが紐かけ渡し白衣干すかも

鬱として曇天のしたに動かざり梢のさくら散り敷けるさくら

どんよりと曇天に一樹立つさくら散るとしもなく散る花のあり

一天は墨すり流し満山の桜のいろは気負ひたちたり

見渡せば河しも遠し河しもの瀬瀬にうつれる春花のかげ

急阪のいただき昏し濛濛と桜のふぶき吹きとざしたり

さやさやと竹さやぐからに出でて見ればしんと桜が咲き居たるかも

塔の沢のいかもの店に女唐停ちその向つ峰の桜花盛りなり

いかものを女唐買ひたりその女唐箱根の桜花の下みちを行く

わがままはやめなとぞおもへしかはあれ春さり来れば桜さきけり

桜花の山は淡墨いろに暮れにけり大烏一羽ひつそり帰る

大暴風うすずみ色の生壁にさくら許多くたたきつけたり

ここにして桜並木はつきにけり遠浪の音かそかにはする

桜花(はな)の山はうしろに高し見はるかす淡墨いろのたそがれの海

いそがはしく吾(われ)を育ててわが母や長閑(のど)に桜も見で逝(ゆ)きませしか

十年(とせ)まへの狂院(きやうゐん)のさくら狂人(きちがひ)のわれが見にける狂院のさくら

狂人のわれが見にける十年まへの真赤きさくら真黒きさくら

狂人(きちがひ)よ狂人(きちがひ)よとてはやされき桜花(さくら)や云(い)ひし人間(ひと)や笑ひし

ふたたびは見る春無(な)けむ狂人(きちがひ)のわれに咲きけむ炎の桜

わが夫(つま)よ十年(とせ)昔のきちがひのわが恐怖(おそれ)たる桜花(はな)あらぬ春

ねむれねむれ子よ汝(な)が母がきちがひのむかし怖れし桜花(はな)あらぬ春

人間の交友(まじわり)のはてはみな儚(はか)な桜見つつし行きがてぬかなし

（来よと宣らせる佐藤春夫氏に厚く謝しつつ）

桜花あかり厨にさせば生魚鉢に三ぼん冴えひかりたり

生ざかな光りて飛べりうす紅の桜の肌の澄みの冷たさ

青空文庫情報

底本：「愛よ、愛」パサージュ叢書、メタローグ
　1999（平成11）年5月8日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集　第八巻」冬樹社
　1976（昭和51）年4月15日初版第1刷発行
初出：「中央公論」
　1924（大正13）年4月号
※「橡《えん》」の表記について、底本は、原文を尊重したとしています。
入力：門田裕志
校正：土屋隆
2004年2月17日作成
2013年10月5日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

桜

岡本かの子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/